

特別支援教育におけるライフキャリア発達を支える実践の検討

— 教職大学院における教師教育の充実を目指して —

大谷 博 俊¹⁾，澤 昌 志²⁾

(キーワード：特別支援教育，ライフキャリア，教職実践力)

I 教職大学院における特別支援教育の専門性向上

鳴門教育大学教職大学院では、再編に伴い、令和 4 年(2022) 年度から、新たに特別支援教育コースが設置される。このことは、教職大学院において、より一層の特別支援教育に関する専門性を向上させる教師教育の実現を目指そうとするためである。

特別支援教育コースでは、特別な教育的支援を必要とする幼児児童生徒の教育・支援に強みをもつ教員を養成するために、特別支援教育に主眼をおいた、キャリア教育と進路指導を学ぶことのできる専門科目を開設する予定である。

教職大学院における特別支援教育の専門性向上には、理論と実践の往還が有用である(八木・荊田・石丸・榎木・中野, 2018)。そのため、特別支援教育コースの前身であるコースが開設する専門科目「特別支援教育におけるキャリア教育・進路指導デザイン」では、小、中学校、そして特別支援学校におけるフィールドワークに基づいて、キャリア教育実践を分析すると共に、教職実践力¹⁾の向上について検討を行ってきた(大谷・高島・山下・俵・田中, 2020; 大谷・立和名・見谷・橋本, 2021)。

そこで本稿では、「特別支援教育におけるキャリア教育・進路指導デザイン」における令和 3 年度のフィールドワーク結果を報告し、分析すると共に、新コースにおける専門科目の充実を図るため、同科目の改善の方向性を明らかにしたい。

以下では、2 節で第 2 著者が小学校における実践と分析について述べ、3 節で第 1 著者が前述の科目における受講者の教職実践力向上に言及し、4 節で総括を行う。尚、本稿の構成、全編にわたる推敲等は第 1 著者が行っており、本節の執筆も行った。

II 小学校における実践事例

ここでは、第 2 著者が参与観察や事後観察及び教員からの聴取に基づき、小学校における教育実践を報告すると共に、実践について考察する。

1 小学校における授業実践例

1) 対象児童

本実践の対象は、A 小学校 6 年生 26 名(うち情緒障害特別支援学級在籍児童 2 名、知的障害特別支援学級在籍児童 2 名を含む)(以下、児童とする)。

2) 指導体制

本実践は、総合的な学習の時間を 3 名の教員(学級担任、特別支援学級担任、支援員)と B 企業のスタッフ 5 名が指導している。

3) 指導計画

本実践は、外部の団体等の協力を得て行われるキャリア教育に関わる授業の 1 つである(以下、キャリア教育出前授業とする)。担任は、キャリア教育出前授業についての事前打ち合わせを B 企業と行っている。

事前学習では、児童が総合的な学習の時間において、B 企業に聞きたい質問を考えている。また、特別の教科道徳において「夢」(新訂新しい道徳 6 編集委員会, 2020)を学習している。

本時(参与観察対象授業)は、B 企業のスタッフによるキャリア教育出前授業である。そして、事後学習としては、児童がキャリア教育出前授業での学びをワークシートに記入し、授業の振り返りをする。また、今後の学習として、他の企業の協力に基づく、キャリア教育出前授業も企画している。

4) 指導の位置づけ及び指導内容

A 小学校のキャリア教育全体計画では、キャリア教

¹⁾ 鳴門教育大学 高度学校教育実践専攻(教職系)

²⁾ 鳴門教育大学大学院 子ども発達支援コース(特別支援教育分野)

育で目指す児童像として「よりよい人間関係を築きながら、夢や希望をもって努力し、意欲をもって学び続ける児童」とあり、児童の実態に基づき、キャリア教育で身に付けさせたい資質・能力を基礎的・汎用的能力の観点で整理している。

A 小学校の資質・能力ごとに定めた具体的な児童の姿の例は、次の通りである。

まず、「人間関係・社会形成能力（かかわる力）」として“友達と協力して学習に取り組む”，“友達の多様な個性を認め、相手の立場に立って行動する”である。次に、「自己理解・自己管理能力（みつめる力）」として“自分の長所に気付き、自分らしさを発揮する”，“話し合いなどに積極的に参加し、自分の意見や気持ちを表現する”である。そして、「課題対応能力（すすむ力）」として“生活や学習上の課題を見つけ、自分の力や友達と協力して解決しようとする”である。最後に、「キャリアプランニング能力（えがく力）」として“将来の生き方や生活を考え、自己の将来を設計する”，“社会生活にはいろいろな役割があることやその大切さがわかる”である。

また、A 小学校では「各学年におけるキャリア教育の重点目標」を設定している。高学年（5・6年）では、“自分や友達の良さを生かし、集団の中でよりよい生活を築こうとする”，“自分の考えや行動に責任をもち、将来の自己実現に向け努力しようとする”としている。

さらに、A 小学校では「総合的な学習の時間におけるキャリア教育」においても“横断的・総合的な学習を通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育む”ことを明示している。ここで取りあげる“キャリア教育出前授業”は、「キャリアプランニング能力」と「総合的な学習の時間におけるキャリア教育」との関連が深い学習になる。

5) 本時の活動

ここでは、参与観察の結果に基づき、キャリア教育出前授業の要点について述べる。

本時の学習が始まる前に、学級担任から児童に向けて「将来の夢について、これからの進路について勉強していく中で、仕事についてのお話をしてくれます」という説明があった。

本時の学習では、児童は、はじめB企業概要の動画を視聴し、建設業の仕事内容について「つくる」「そなえる」「まもる」の観点からの説明を聞いた。これらは、B企業が生活に必要な“家やお店、公共のトンネルや道路”を「つくり」、地震や大雨などの“災害”から地域の人々を「まもる」ために「そなえる」仕事をしており、換言すれば地域の生活と安全になくてはならない大事な仕事であることを児童が学ぶことを期待してのことである。

次に、児童が事前学習で考えていた質問をし、B企業のスタッフからの回答を聞いた。例えば、「どのような気持ちで工事をしているか」や「仕事をして良かったと思うこと」等の質問があった。各グループの代表者がグループを代表して、グループで事前に考えた質問をしていた。情緒障害特別支援学級に在籍する児童Cもグループを代表して質問をしていた。

その後、児童は2グループに分かれ、ICT機器を使ったドローン操縦体験や高度なレーザースキャナーを体験した。児童Cは、特別支援学級担任からの言葉かけが時折見られたものの、友達と一緒に体験を楽しむ様子が観察できた。

最後の学習は防災クイズであった。児童は、建設業についての○×クイズに答えた。授業終了時点で、学級担任が、「将来のことを考える授業をしてくれました」という結びの言葉を児童に伝えた。

6) 学級担任からの聴取

本時の活動の後日、学級担任に聴取を行った。ここでは聴取結果の要点を述べる。

担任がキャリア教育出前授業を取り入れた意図としては、児童にとって身近なものづくりの企業を招き、児童が実際に働いている人の話を聞いたり、現物を見たり、現物に触れたりすることで、座学では感じられないことを体験してほしいという思いがあったようである。

担任がキャリア教育出前授業で大切にしたいこととしては、児童が仕事の内容に目を向けるだけではなく、仕事をする上で大切なことに気づくことであった。仕事をする上で大切なこととしては、地域や社会に目を向け、自分のためだけでなく人の役に立つということを想定していた。このような学級担任の思いは、キャリア教育出前授業における事前の打ち合わせの際に、B企業に伝えられている。

そして、事前学習で児童が質問を考える際にも、“進路を考える上でどんなことを聞きたいか”と児童に質問の方向性を示したとのことであった。

事後学習における児童の感想や様子から、児童のキャリア形成につながったと思われる点について、担任の所感としては、「働くことはお金のためだけではない」「人の役に立つこと」「仕事は会社に入ってもその中でいろんな仕事がある」等に理解が深まったことが挙げられた。

一方、キャリア教育出前授業で企業側にもっとこうしてほしい点について回答を求めると、B企業のスタッフ全員の“会社に入社した理由や仕事のやりがい”を聞いたかったとのことであった。このことについては、キャリア教育出前授業の中で、B企業のスタッフ1名が回答していたが、働いている人の思いにもっと触れてもらいたかったと、学級担任が省察していた。

2 ライフキャリアの視点からの考察

ここでは、ライフキャリア発達支援の要点（大谷、2022）に基づき、実践を考察する。

1) 「時間軸を明確に位置づける」について

参与観察や事後観察の結果及び学級担任からの聴取から、「時間軸を明確に位置づける」を“時間軸を意識した教員の実践によって、児童が学ぶことと自己の将来とのつながりを見通すことができる”と捉え、考察する。

学級担任は、B企業と事前の打ち合わせを行い、授業の意図を伝え、キャリア教育出前授業で企業側の思いを紹介してもらうことを確認している。また、キャリア教育出前授業の事前学習を行っている。B企業への質問を考える際には、“進路を考える上でどんなことを聞きたいか”と児童に質問の方向性を示している。そして、特別の教科道徳においても、“夢や目標をもって進んでいくことの大切さ”を学ぶ機会を設けている。

このように、本時の学習までの学びも、そして本時の学びも“現在から将来に至る時間の流れ”を意識した実践であったからこそ、事後指導の感想として、“働くことはお金のためだけではない”ことや“人の役に立つ”という児童の気づきにつながったのではないだろうか。特に学級担任の時間軸を意識した指導計画に基づいた事前学習によって、キャリア教育出前授業に臨む児童には、学ぶことと自己の将来とのつながりを意識できる素地ができていたと考えられる。

また、学級担任は、6年生の児童の意識を中学校生活に向けてどのようにつなげていくか、年間を通して、タイムスケジュールを把握し、見通していた。そのため、学級担任は、児童に学期ごとや行事での“めあて”を立てること、“振り返り”を行うことを促し、最終的には1年間を通しての自分自身を振り返り、自己理解を深めることで、児童の意識を中学校生活へつなげていこうとしていたようである。

これらの成果は、教室の環境（室内の掲示版）に見て取ることができた。児童それぞれが1学期の目標を決め、なりたい自分になるために、具体的な行動を考えていた。そして、1学期の反省を行い、どのくらいできたかを振り返り、2学期の目標を立てることができていた。そして、これらの成果は、特別な教育的支援を必要とする児童においても同様に認められた。

情緒障害特別支援学級に在籍する児童Cは、5年生の時にはいらした時に授業に参加できなかつたり、感情を抑えることができなかつたりしていたが、6年生になり「いらした時に気持ちがおさえられるようになった」と1学期を振り返っていた。また、児童Cは、小学生にとって大きな行事である運動会にも“めあて”をもって取り組み、振り返りをしていった。児童Cは「中

学校にいても態度をしっかりときちんとかんばろうと思いました」と記し、運動会の振り返りだけでなく、これからの自分を見通すことができていた。

2) 「多様な人生役割（ロール）を想定する」について

参与観察や事後観察の結果及び学級担任からの聴取から、「多様な人生役割（ロール）を想定する」を“自分がしたい役割や自分に適切な役割だけではなく、与えられた役割であっても、人のために働く（貢献する）ことができる”と捉え、考察する。

キャリア教育出前授業の中で、「B企業では、家だけを建てる人もいるし、橋だけを作る人もいるし、ビルだけ建てる人もいる。客の要望に応えられるようにやりがいや働きがいをもって仕事をしている。」という話がB企業のスタッフからあった。このことから、部署ごとに専門の仕事をしていることと、特定の仕事であっても、会社組織では、いろいろな仕事があるということが分かる。就労した際に、自分がしたい仕事、自分に適した仕事が常にできるとは限らない。就労して働き続けるために大切になってくるのは、誰かのためにやりがいをもって働くことができることではないだろうか。

A小学校の6年生のクラスでは、“当番”活動と“係”活動を区別していた。当番は、必ずする仕事で、係はクラスのみなが楽しめるために、クラスがよくなるために自主的にする活動である。例えば、当番活動として、掃除当番、給食当番、毎日当番、教科当番があった。このことは、当番を細かく分け、誰の仕事であるかを明確にすることで責任をもって取り組んでほしいというねらいがあると学級担任から説明があった。

また、A小学校の6年生には、最高学年として学校のためのさまざまな役割もある。あいさつ当番で学校を明るくする役割、縦割り班活動で班をまとめる役割、運動会を引っ張っていく役割など生活場面で活躍できる場が多くある。特に運動会では競技での役割だけでなく、運営のための係りも担っており、運動会を成功させたという達成感を味わえる大事な行事として位置づけられている。事後の観察において、教室内の掲示物に、「応援団では大きく声を出して、みんなもリズムに合わせてくれたのでうまくいきました。」という情緒障害特別支援学級に在籍する児童Cの感想を確認することができた。これらの役割については、特別な教育的支援の必要な児童においても重要であるといえる。そして、このような達成感は、誰かのためにやりがいをもって働く（貢献する）ことにつながることを期待できよう。

3) 「物理的な環境（例えば、教材）に加えて、人的な環境（例えば、教員の指導言）にも配慮する」について

参与観察の結果及び学級担任からの聴取から、「物理的な環境（例えば、教材）に加えて、人的な環境（例えば、教員の指導言）にも配慮する」をキャリア教育出前授業の特徴から“専門的な具体物に触れる意味付けと教員が企業に伝えてほしいことを事前に打ち合わせる”と捉え、考察する。

キャリア教育出前授業では、普通の学校の授業では触れることのできない専門的な機器に触れることができる。今回の授業では、ICT 機器を使ったドローン操縦体験や高度なレーザースキャナーを体験することができた。このような機器に実際に触れることは、仕事に興味をもつ契機になるだろう。しかし、体験活動がただ楽しいだけで終わるのではなく、なぜその機器に触れるのかも教員としては考えなければならないだろう。

ドローン操縦体験や高度なレーザースキャナーは、正確に測量する際に大切な機器であり、測量は建築の重要な部分であると考えられる。キャリア教育出前授業では、企業に全ておまかせで、企業が伝えたいことだけを伝えるという展開では、教員が意図するキャリア教育とズレが生じてくることもあるのではないだろうか。今回、学級担任はB企業との事前の打ち合わせを行い、教員の考えを伝え、キャリア教育出前授業では、企業で働く人の思いを紹介してもらうことを依頼し、了承を得ている。その結果、B企業のスタッフは建設業の魅力や人のために役立つ仕事であることを児童に伝えていた。つまり、教材教具として機器を使用し、児童に建設について伝えるB企業のスタッフが教員としての役割を担えるように誘導しようとしているといえよう。その意味で、今回のキャリア教育出前授業は、学級担任の思いが反映されたものであると考えられる。

4) 「教員・児童生徒間、あるいは児童生徒同士といった関係性が重要である」について

参与観察や事後観察の結果及び学級担任からの聴取から、「教員・児童生徒間、あるいは児童生徒同士といった関係性が重要である」を“他者と関わる中で、自己をより認識することができる”と捉え、考察する。

これらのことは、「多様な人生役割（ロール）を想定する」とも相互に関連してくると考えられる。教室に掲示されていた児童Cの運動会の振り返りには、「応援団では大きく声を出して、みんなリズムに合わせてくれたのでうまくいきました。とても思い出に残った運動会でした。」という感想を確認することができた。このことは、他者と関わる中で、自分の役割や頑張り、達成感等をより認識できたことを示唆しているといえる。

また、児童Cについて、学級担任は、「学級の中で活発でムードメーカー」だと話していた。このことは、学級担任が、児童Cに“応援団”という活躍する場を見出すことができるという、教員・児童間関係の良好さを示すものであり、ライフキャリア発達支援にとって、重要であると考えられる。

Ⅲ 「特別支援教育におけるキャリア教育・進路指導デザイン」における教職実践力の向上

本節は、教職大学院の授業である「特別支援教育におけるキャリア教育・進路指導デザイン」における受講者の教職実践力向上について、検討することを目的としている。

1 検討の手続き

教職実践力を検討するにあたって、分析の対象とするのは、受講者のレポートである。6名の受講者には、A及びD小学校における参与観察や先の小学校教員からの聴取に基づき報告された教育実践とその考察、そしてライフキャリア関連論文の検討を終えた時点で、次のように教示し、Moodle への回答を求めた。

まず、本授業の主要テーマであるライフキャリアについては、「ここまでの授業を通して、あなたの特別支援教育におけるライフキャリアや発達支援の認識は深まりましたか。次の語句を適宜選び、用いて、ライフキャリアや発達支援の認識の深まりについて言及しなさい。

“人と環境との相互作用の結果”，“時間的流れ”，“空間的な広がり”，“個別性”，“キャリアという言葉のイメージ”，“現在と将来をつなぐ教育”，“人生の役割への疑問”，“環境的に補うという発想”，“将来の可能性を行動レベルでとらえる”，“能力・態度内容をかみ砕く”，“他者と関わる過程で判定される自己”，“自己認識を把握する”]

次に鳴門教育大学教職大学院の3領域10観点²⁾については、「ここまでの授業を通して、あなたの教職実践力は向上しましたか。次の語句を適宜選び、用いて、教職実践力の向上について言及しなさい。“カリキュラム開発力…学校の教育課程”，“教科・領域内容研究力…教科等の背景にある専門諸科学”，“授業実践力…キャリア発達支援に関わる授業実践”，“生徒指導力…キャリア発達支援に関わる児童生徒の理解と支援”，“学級経営力…キャリア発達支援に関わる学級づくり・運営”，“経験から学ぶ力…省察にもとづく実践の意味や課題”，“未来に向けて学ぶ力…あるべき姿やめざす教員としての課題に向かう学び”，“コミュニケーション力…対人対話や対人交流”，“コーディネート力…協働のための人、時間、環境、教育内容などの調整”，“マネジメント力…キャリア発達支援目標の達成に向けた組織運営や組織改善”]

表1 内容における重要語

E1 主題	自分 知る 理解 役割 果たす
E2 主題	現在 過去
F1 主題	キャリア 広がる ライフ 視点
F2 主題	キャリア
G1 主題	キャリア 自分 気づく 認識 言葉 ライフ イメージ
G2 主題	環境 補う 自身 他者 自己
G3 主題	学校 キャリア
H1 主題	キャリア 言葉 イメージ 以前 ワーク 偏る 講義
H2 主題	児童 将来 学ぶ つながり 見通す 難しい 考える
H3 主題	能力 キャリア 定義 たくさん 知る
I1 主題	キャリア 特別支援学校 狙う 教育 将来
I2 主題	時間 流れ 意識 積み上げる 役割 持つ 感じる
J1 主題	授業 フィールドワーク 時間 意識 教員 指導 計画
J2 主題	教員 つながり 児童 生徒 意識 難しい 意図
J3 主題	考える 必要
J4 主題	具体的 内容 指導

2 結果の処理

回答の分析にあたっては、統合型テキストマイニングのためのソフトウェア Total Environment for Text Data Mining³⁾ (以下、TETDM とする) を用いた。まず段落や接続語に着目し、回答を内容のまとまりに分け、TETDM の「まとめとエディタ」を用いて各内容の主題 (重要語) を抽出した。

次に TETDM の「単語間関係 (関連度)」⁴⁾ を用いて、重要語と他の単語との関連を確認し、関連度の高い語句群を選定した。合わせて、重要語以外で回答者の意図が込められていると推測される単語と他の単語との関連についても確認し、関連度の高い語句群を選定した。

3 ライフキャリアに関する分析

抽出した受講者 (E~J) の各内容における重要語を表1に示した。受講者 (E~J) の内容における関連度の高い語句群を表2に示した。「」は単語間のつながりが最も多い⁴⁾ことを示している。

4 3領域10観点に関する分析

受講者が言及した“教育実践力”は「カリキュラム開発力」, 「教科・領域内容研究力」, 「授業実践力」, 「学級経営力」であり, “自己教育力”は「経験から学ぶ力」であり, “教職協働力”は「マネジメント力」であった。

回答が得られた受講者 (F~J) の各内容における重要語を表3に示した。

受講者 (F~J) の内容における関連度の高い語句群

表2 内容における関連度の高い語句群

E1 単語間関係	「環境」 児童 補う 気づき 促す
E2 単語間関係	「環境」 補う
F1 単語間関係	「難しい」 広がる 理解 捉える 視点 概念
F1 単語間関係	「重要」 理論 裏付け 過去 将来
G1 単語間関係	「補う」 時間 人的 支援 関わる 過程 自身 気づく 認識
H1 単語間関係	「つなぐ (がり/がる)」 視点 現在 授業 教師 挑む 楽しい 学ぶ 積み重ねる 教育 結果 育む
I1 単語間関係	「教育」 自立 思う 差異 難しい 疑問
I2 単語間関係	時間 「障害」 子ども 能力・態度 砕く 重要
J1 単語間関係	出前 時間 思い 「学ぶ」 分かる 認識
J2 単語間関係	つながり 意識 難しい 教員 理解 「深める」 振り返る 発達 実践 関連 充実
J3 単語間関係	発想 支援 配慮 授業 児童 手順 「育成」 関係

表3 内容における重要語

F1 主題	「経験から学ぶ力」 指導 自身 フィールドワーク レポート 学校あらゆる ところ
F2 主題	「マネジメント力」 生徒 目指す 実態 把握 しっ かり
G1 主題	「カリキュラム開発力」 キャリア 目指す 児童 向 ける 目標
G2 主題	「授業実践力」「教科・領域内容研究力」 つながり 学ぶ 考える 先行研究 重要 知る
G3 主題	「学級経営力」 教員 設ける 大切 考える 知的障 がい 子ども
H1 主題	「学級経営力」 活動 仕事 当番 絶対 係 みんな 学校
H2 主題	「授業実践力」 視点 学年 学習 内容 想起 広げ る 新た
H3 主題	「授業実践力」 子ども 学び 連続 考え 広げる 教員 連携
I1 主題	「経験から学ぶ力」 キャリア 観点 フィールドワ ーク 振り返る 経験 学ぶ 活用
I3 主題	「カリキュラム開発力」 実際 どう 横断 縦断 組 織 まだまだ 発揮
J1 主題	「学級経営力」 係 活動

を表4に示した。「」は単語間のつながりが最も多い⁴⁾ことを示している。

表4 内容における関連度の高い語句群

F1 単語間関係	自身 学校 あらゆる 知る 限らず 全て 理論 「評価」
F2 単語間関係	マネジメント 向上 言えない 関わらず 全 て 「学んだ」 把握
G1 単語間関係	現職 院生 児童像 企業 教員 積極的 学 校 キャリア 「組織」 運営 情報
G2 単語間関係	「つながり / つながる / つなげる」
G3 単語間関係	役割 果たす 機会 考える づくり 「知的 障がい」 子ども 自尊 教員 評価 つなげる
H1 単語間関係	係 「生活」 仕事 位置づける より つなが る 内容 現場
H3 単語間関係	学び 「連続」 考え 教員 指導
J1 単語間関係	「活動」 教育 育成 充実 考える 発想 反 省 現場

5 ライフキャリアに関する分析の考察

受講者のライフキャリア, その発達支援についての認識は変化したと考えられる。

まず, ライフキャリア, つまりキャリア概念であるが, ワークキャリアにやや傾注していたものが, 拡充されている (例えば, 表1のF1, G1, H1)。

キャリア教育の諸概念は, 中核となるものであっても, 教員には馴染みが少なく, それらを表す用語の解釈には時間が必要となる (石川・田淵・稗貫・中村・宮崎, 2013)。それだけに, キャリアを主たるテーマとした教職大学院での授業は, 意義あることだといえ, 先の認識変化は, 本授業の成果だと考えられる。

一方, このような認識変化に懸念すべきことはないのだろうか。キャリア概念は, ワークキャリアとライフキャリアに分けてとらえることができるが, 今日では, ワークキャリアを含み, より広義の概念としてのライフキャリアを指すのが一般的である (川崎, 2007)。また, キャリア概念は, 多義的であるとも言われ (渡辺, 2018), ある意味難解である。このことを考慮し, 改めて分析結果を確認すると, “難しい” (表2のF1, I1), “疑問” (表2のI1) といった語句のあることが見て取れる。回答の原文と照合すると, これらは, 認識拡大に伴う概念理解の困難, あるいは既存の教育実践とキャリア教育の差異の理解困難や区別することへの疑問を示すものであることが分かる。

これらのことから, 本授業においては, キャリア教育の射程を検討する機会の提供が十分でなかったことが推察される。文部科学省 (2011) は, 中央教育審議会の答申において, キャリア教育で育む中核的な基礎的・汎用的能力を導入するにあたり, 基礎的・基本的な知識・技能を始めとする諸能力を明示し, その関係を構造的に整理している。また, 名古屋 (2013) は, 知的障がいの特性に応じた教育を進めるにあたっては, 「主体的活動能

力」を他の能力と独立させ, しかも他に優先した位置づけにすべきであると主張している。今後の本授業の展開においては, 受講者がキャリア概念と教育との関連を整理できるような機会をより一層取り入れる必要があるだろう。

次に, キャリア概念に不可欠の要素についてである。受講者は, その存在を認識するに至っている (例えば, 表1のE2, I2, 表2のG1, J1)。キャリア概念に不可欠な4要素 (渡辺, 2018) のうち, 特に「時間的流れ」の存在が強く認識されたといえよう。一方, その他の要素に関連する気づきも散見されるが, 「個別性」については, 関連を示す語句が見当たらない。キャリア概念において, 「個別性」は最も重要な要素である (渡辺, 2018)。今後の本授業の展開においては, 文献の検討, フィールドワークに基づく実践の分析などを通して, その重要性を明確にする必要があると考えられる。

6 3領域10観点に関する分析の考察

受講者の3領域に関わる教職実践力は変化したと考えられる。

まず, 自己教育力の「経験から学ぶ力」の向上が挙げられる。そして, この力には, フィールドワークが影響を与えていることが分かる (例えば, 表3のF1, I1)。本授業では, 受講者に, 公立学校などの授業や指導の参与観察, 教員からの聴取などのフィールドワークを必須の課題としており, 受講者の教職実践力向上は, その成果であるといえる。

一方, 「マネジメント力」, 「カリキュラム開発力」についての向上には疑問が残る (例えば, 表3のI3, 表4のF2)。本授業で課しているフィールドワークは, 実習の一つであるが, 教職大学院の実習については, 実習での取り組みと, 大学教員と共に行う省察, そして, そこで見いだした知識を再試行するという実践力を高めるサイクルを機能させることが重要になる (清水・佐藤・川上・田村・菅野, 2021)。本授業においてもサイクルをどのように機能させるのかが問われていると考えられる。

次に教育実践力の「学級経営力」についてである。

受講者の回答からは, 学級活動の内容 (文部科学省, 2018) に深く関わりのある児童の役割⁵⁾と支援に気づき, 修了後の抱負に至るまで言及されていることが分かる (例えば, 表3のH1, J1)。また, 学級活動における日常生活や学習への適応 (文部科学省, 2018) の支援に不可欠な障害特性への着目もみられる。

これらのことは, 受講者の学級経営力の向上を示唆するものであり, 本授業の成果であると考えられる。

ところで, 本授業におけるフィールドワーク後に行った, 教育実践の報告とその検討の意義をどのように解すればよいだろうか。教員の専門性が, 「行為の中の省察

に基づく反省的実践によって向上する」(清水, 2017)ならば, 本授業の取り組みは, “ふり返り”の充実だといえるのではないだろうか。今後の本授業の展開においても, 3領域10観点の教職実践力を具体性のある教育活動と関連づけることができるような機会を設定することが必要であると考えられる。

IV 本研究の総括

第2節の小学校における事例は, 地域の社会資源を活用した児童のライフキャリアを育む実践である。ここでは, その有用性が示されたといえる。

ただし, 発達障がいのある児童を含む対象児童のライフキャリアを育むためには, 学年の始まりから現在, そして中学校への進学といった近い将来, さらに社会における就労という時間の流れを, 一連の軸として, 教員が見通すことが必要になる。合わせて, 特定の授業のみをライフキャリアの育成にあてるのではなく, 学校生活において大きな位置を占める運動会などの行事や日常の学級活動などを関連づけながら育むという姿勢が教員には必要になるだろう。

また, 第3節では, 教職実践力向上に対して, 分析対象となった教職大学院授業の有用性が示されたといえる。

新コースにおける特別支援教育に主眼をおいた, キャリア教育と進路指導を学ぶことのできる専門科目では, フィールドワークを導入し, その“ふり返り”が充実するような学内での授業が必要であると考えられる。また, 先の“ふり返り”で受講者が見いだした知識を再試行し, 実践力を高めるサイクルを生み出すような授業設計の必要性が示されたといえる。

注

- 1) 鳴門教育大学高度学校教育実践専攻(教職大学院)では, 「教育実践力」, 「自己教育力」, 「教職協働力」の3領域で構成する教員の力を「教職実践力」としている。
- 2) 鳴門教育大学高度学校教育実践専攻(教職大学院)が設定している教職実践力3領域には10の観点が設定されている。“授業実践力”は「教育実践力」の観点, “経験から学ぶ力”および“未来に向けて学ぶ力”は「自己教育力」の観点, そして“コーディネート力”は「教職協働力」の観点である。
- 3) TETDMは, 複数のテキストマイニング技術を組み合わせて使える統合環境として, 電子テキストを用いた創造的活動を支援する目的で開発されたフリーソフトである(佐山, 2020)。
- 4) TETDMでは「可視化ツール」の「単語間関係(関

連度)」を用いることで, 関連度の高い単語が確認できる。

- 5) 小学校学習指導要領(平成29年告示)解説特別活動編(文部科学省, 2018)には, 特別活動における「学級活動」の内容として, “学級内の組織づくりや役割の自覚”が示されている。「係」や「当番」による活動は, 学級における児童の重要な役割である。

謝辞

本稿におけるフィールドワークおよび事例報告等は, 協力校の小学校の校長先生を始め, 関係する皆様のご理解とご協力を得たものです。研究論文執筆にあたり, 著者を代表し, ここに付して感謝の意を表します。本研究の一部はJSPS科研費JP19K14286の助成を受けた。

文献

- 石川則子・田淵 健・稗貫真理子・中村昭彦・宮崎 眞(2013) 知的障害特別支援学校におけるキャリア教育の取り組みに関する検討—キャリア教育の研究実践に取り組んだ教員の意識の変化を通して—。岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 12, 235 - 251.
- 川崎友嗣(2007) キャリアとは何か—キャリア概念の今日的な意味を考える—。発達障害研究, 29(5), 302 - 309.
- 文部科学省(2011) 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)。
- 文部科学省(2018) 小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別活動編。
- 名古屋恒彦(2013) I 知的障害教育におけるキャリア教育の意義・課題。名古屋恒彦著, 知的障害教育発, キャリア教育。東洋館出版, 7 - 33.
- 大谷博俊・高島裕子・山下 幸・俵はるか・田中和也(2020) 特別支援教育におけるキャリア教育実践と教師教育の検討—ライフキャリア支援に係る教職実践力向上を目指して—。鳴門教育大学授業実践研究, 19, 55 - 62.
- 大谷博俊・立和名信行・見谷真希・橋本加寿代(2021) 現職教員の特別支援教育に関する教職実践力を高める—教職大学院における「キャリア教育・進路指導」の授業を通して—。鳴門教育大学授業実践研究, 20, 53 - 60.
- 大谷博俊(2022) ライフキャリアを育む教育プログラムのための論点整理—自閉スペクトラム症のある児童生徒に視点をあてて—。鳴門教育大学学校教育研究紀要, 36, 123 - 128.
- 砂山 渡(2020) フリーソフトTETDMで学ぶ実践データ分析。

清水 将・佐藤 進・川上圭一・田村 忠・菅野 亨(2021)
教職大学院における実践研究とは何か—科学的方法と
技術開発の視点から. 岩手大学大学院教育学研究科研
究年報, 5, 181 - 194.

清水 将 (2017) 教職大学院の学校における実習の在り
方に関する検討—教育公務員特例法の改正に基づく教
師の資質能力向上を踏まえて—. 岩手大学大学院教育
学研究科研究年報, 1, 83 - 94.

新訂新しい道徳6編集委員会 (2020) 31 夢. 渡邊 満・
押谷由夫 代表, 新訂新しい道徳6. 東京書籍株式
会社, 156 - 159.

渡辺三枝子 (2018) 第1章「キャリアの心理学」を学ぶ
にあたって. 渡辺三枝子編著, 新版キャリアの心理学
[第2版]. ナカニシヤ出版, 1 - 31.

八木良広・荻田知則・石丸利恵・檜木暢子・中野浩輔(2018)
教職大学院における特別支援教育の専門性向上カリ
キュラムの検討. 言語発達障害研究, 16, 5 - 16.